
二次元野郎と・・・

勿論西村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二次元野郎と・・・

【Nコード】

N0364Z

【作者名】

勿論西村

【あらすじ】

俺は二次元しか興味ない。

しかしそんな俺がある日先生に呼ばれ

クラスメイトの不登校になった宮木京子を学校に呼べと言われた

その理由は前まで俺が不登校だったからだ

そんな理由で面倒くさい事をする

宮木とミッドナイト

キンコン・・・・

授業終了チャイムが鳴り響く

そして俺が伏せていた顔を上げると担任の教師と目があつた

「佐藤君、ちょっと来て。」

佐藤君とは俺の事である。

先生に呼ばれるがまま俺は（面倒くさいが）席を立った
俺が先生の前に立つ。何の説教だ？

「宮木さんの事なんだけど。」

小さく先生が言う。

宮木京子、彼女は俺のクラスメイトで今現在学校には来ていない。
所謂不登校と言うやつだ。

なんて羨ましいんだ。

「羨ましくありませんよ、」

「人の心の中を読まないでください。」
すると先生がぽかんと言う顔をして

「口に出してましたよ。」

「んな、――で、宮木がどうしたんです？」

俺が本題に戻す、すると先生が顔を曇らせて

「彼女を学校に呼んでほしいのよ」

「無理ですね。」

不登校になると、殆んど復帰するのは無理だ。

「でも、キミは不登校から復帰したでしょ？」

そう、俺も前まで学校を休んでいた。休んでいた！

「俺の場合は不登校ではなく長期休暇です。」

「そんなの同じでしょ！」

違う、俺の場合アニメを見たいがために学校を長期休暇しただけだ。

ちなみに自分で言うのもアレだが、俺は結構もてる。

「貴方の容姿なら彼女もおとせるはずよ。」

「先生。俺は二次元にしか興味ありません。」

苦笑いを浮かべる先生だが、コレは事実だ。

これまでに数回俺は告白されたがすべてを二次元を理由に断った

「とにかく、彼女の家に行ってみてください」

「は？」

「・・・・・・お願い、」

チッあそこまで（土下座）されたら断れねえじゃねえか

俺はぶつぶつ言いながら、もらったメモに書いてある住所に向かった
ちよつと迷いながらも何とか到着した。

玄関の前でインターフォンを押そうとする、がやめる

もし出てきたらなにを言うんだ？

「学校に来てくれ」・・・・・・か？

そんなこと言われて出てくる奴なんではないよ。

「キミ、何してるの？」

といきなり背後から声が聞こえ、ビクンつと驚く

振り向いてみると、20後半から30前半位の女性が立っていた

両手にはスーパールの袋、買い物帰りとみた

「京子のお友達？」

「あ、いや・・・そ、そうです」

俺は宮木の母親と思われる女性に頭を下げる

「どうぞ上がってください。」

そう言うのと玄関扉を開けて中へ招いてくれた

玄関口は広く、片付いていた

スリッパを借りて、リビングに案内される。

麦茶を出してくれたのでいただく

宮木の母親が向かいあいの椅子に座り

「京子はね、昔はこんな子じゃなかったの、」

宮木の事を話してくれた、いや語ってくれた
どうやら部屋にひきこもっているようだ。

引きこもりだした理由はあるアニメに釘づけになって出てこないよ
うだ。

「一度、京子さんに合わせてくれませんか？」

「・・・出来る限りの事はするわ」

そう言うとりビングを出て2階に向かった。

部屋のドアには『きょうこ』と書かれたプレートがある

コンコンと母親さんがノックする

「京子、お友達が顔を見たいって・・・」

そう言うが反応が帰って来ない。

するとしばらくしてガチャツと鍵が開かれる音がするので

母親がドアを開けようとする

ガッ、ガッ・・・

今しめたのか！！！！

あの音は開く音じゃなくて閉める音かよ！！

「京子お願い、もう一度開けて、」

母親さんが泣きそうな声で言う。

相変わらず声はしないが、

何回か鍵がガチャガチャ鳴る。

閉めたり開けたりしてるのか？

そしてガチャ音が鳴り終わると

きいゝゝゝと音を立ててドアが開いた。

それを見て母親がしたにおりて行く。

部屋の中はクーラーがきいていてカーテンが閉められ電気が付いて
いない、唯一の光はパソコンの画面の光。そして、ドアがきいゝゝ
としまつていく、

ボタンッと閉まりきると一気にガチャガチャ・・・と鍵が閉まる音が何回も連続する。

「なっ！」

俺が振り返ってドアを見ると暗証番号やら、カードキーやらの鍵が何個も付いていた。

「凄いな、俺はここまでしなかったぞ・・・」

「貴方誰？」

画面を見ている宮木が俺に聞いてくる

「俺か？俺は佐藤康。」

てか俺主人公だよな？今フルネーム出たぞ！？

「何しに来た？」

「話しに来た。・・・うーん何のアニメ？」

アニメの事を聞かれぴくんと反応する

すると宮木は画面を見たままアニメの事を話してくれた

「『ミッドナイト』よ。」

「ああ原作・藤島夜先生の三作品目のライトノベルアニメか」

俺はほぼすべてのアニメを見てる、原作も好きなのは見ている

「知ってるの？」

「いや、コレくらい一般常識だろ？」

その言葉で俺を同志と思ったのか、椅子に乗ったままぐるっと回転して俺の方に向き直る

「アニメ全話見た？」

「勿論1期から今やってる3期まですべてにおいてリアルタイムで見てる。」

暗い部屋に目が慣れてきた、よく見ると部屋の壁にはミッドナイトのポスターが棚にはフィギュアやキラグッズ、そして本棚に原作本と同人誌がズラーっと並んでいる。

俺は思う、宮木はせまく深いな。

ちなみに俺は広く深い。

「宮木は誰が好きだ？」

「アタシは、ヤミーが好き。」

ヤミーはツンデレキャラとして出てきているが出番が多いとは言えない。

「そうか、俺はミルギとか好きかな。」

「ああミルギもいいかも」

ミルギはおっとりしたキャラでドジっ子と言うまあよくあるキャラだ
「所で、今なに見てたんだ？」

俺が画面を指さし聞くと

「今第2期の5話を見てたところ、」

「何通り見た？」

「20通り位かな。」

ちよっと偉そうに言うが、俺の方が上だな

全アニメ最低でも25通りは見る……が

「凄い見たな、」

「でしょ？アタシはソレほど愛が深いのよ。」

と言うかなんで25回も見れるか、疑問に思う人もいるでしょうから説明。

授業中に顔を伏せているのは寝てるのではなく、アニメを見てるから
ちなみに、イヤフォンを付けているが、髪が長くて耳が隠れて
るのでばれない。

「最新のフィギュア買った？」

「勿論、買った。」

「じゃあじゃあ……キャラソンCDは？」

次々と質問してくる宮木。

宮木と話しているとドンドン時間が過ぎて行く。

《ピピピピピ……》と突然俺の時計が鳴る。

時間を見ると19時になっていた。

この時間はいつもアニメを見ている。

「もうこんな時間か……そんなじゃ、そろそろ帰るわ」

「ええ？もう帰っちゃうん？」

何か寂しそうに言う宮木、だが俺は気にせずドアノブに手をかける。
・・が

鍵、解除して。

20時。あの後結局出る事が出来ずに

俺は宮木の話しに付き合わされた・・・が

「明日学校で話そう」と言ったら帰してくれた

家に帰り最新話のアニメ（何回も同じ回）を見る

そして翌日――土曜日。

カレンダーを見た俺はやってしまった感があった。

そして月曜日。いつもあいている席には宮木の姿があった。

「なんで土曜日来なかったん!？」

教室に入ると怒鳴られる俺。相手はモチロン宮木

はあと溜め息をつき、俺の席に着く

「昨日は学校休みだろ？」

「でも明日学校で話そうって！」

怒っているようだが彼女の表情は金曜日に始めてあった時とは違って
明るかった。その笑顔が俺にはまぶしすぎた

「良いだろ、学校なかったんだから。」

「嘘つき!ヤスのバーカ。」

?ヤスのバーカ?そう笑顔で言った宮木だが、これを無表情で聞いた
たこのがあるような気がした。そう遠くない過去、数か月前位だった
か・・・確かあれは・・・いつどこで聞いたんだ?思い出せそう

で思い出せない。いやきいてないような気がしてきた。読んだ・
？そんなの読む訳が・・・
俺の脳裏をよぎる記憶・・・

もし宮木が居なかったら俺はまだ。

武藤とAKD49（前書き）

AKD49は凄く似ているAKB48とは全く関係ありません。

武藤とAKD49

宮木を学校に引きずり出してから
ずっと宮木のアニメ談に付き合わされてほとんどのアニメを見てい
ない

そんなこんなで、ちょうど一週間がたつ。

カタカタカタ・・・

誰もいない学校の中庭にパソコンのキーボードを打つ音が響く
勿論俺のパソコンだ。

画面には今日の深夜に放送したアニメの18回目が映し出されている
ちなみに説明しなかったが俺は17歳高校生だ。後一年だよ！楽しみ
と急に俺の前に人影が現れた。

コレも説明してなかった担任教師の鈴木先生。(♀)だ

「佐藤君。また学校でアニメを見てるんですね!？」

「ああ？ああ・・・そうですね・・・」

ちなみに今週この人に没収されたパソコンは9台。

俺はそれを思い出し、ベンチからすつと腰を上げる。

パタンとパソコンを閉じて・・・ダッシュ!!

「こら！待ちなさい。」

「おいつけるもんなら追いついてみろ!」

ここでバカにしたのが悪かった。

「言いましたね？本気を出しますよ。」

そう言うと、鈴木先生が全力ダッシュで俺のところに飛んでくる。
俺も負けじと走るがパソコンが邪魔だ。

ふと後ろを振り返ると、先生は居なく、静かだった

「はぁ、逃げ切ったか・・・?」

と溜め息をつきながらベンチに腰を下ろそう前を見ると。

目のまえにババア(鈴木先生)が立っていた。

生徒指導室（今週10回目）に入り、鈴木先生の有りがたい説教をもらう

「で、先生。今までのパソコンは・・・？」

「あれはわたしが分解して、ガン〇ムを製造しています。」

「個人的にエヴ〇初号機が好きです。」

「ガンダ〇世代ですから。エヴ〇もいいですねどね。」

「〇ヴァは素晴らしいと思います。まあ〇ンダムも捨てがたいですけど。」

と俺のパソコンを奪い取った鈴木先生がガン〇ダムの事を語ってくれた。

別にどうでもいい。

「で、そのパソコンの却ってくる見込みは？」

「そうですね。」

と言う事で俺は俺のパソコンを取り戻すためにガン〇ムに乗り込んだ
「佐藤行きます！！！！」

なんて幻想は捨てて、俺は2年B組に来た。

何かまた面倒な奴が居るらしい。

そいつの名前は『武藤治弥』どうやらそいつを現実に引きずり出してほしいらしい。

と言うかこいつも二次元やろうなのか？なら俺でも簡単に

「失礼します。B組の武藤君いますか・・・？」

俺は面倒くさそうにB組に呼び掛ける。

「・・・武藤？」

「え？あいつ生きてるの？」

すると教室中がざわめく。何だ？いじめられてんのか？

「ええ・・・と、武藤は？」

俺は全く顔を見たことない男子生徒に聞いてみると

彼はすっと指さす。その先には眼鏡をかけて真面目そうな顔をした男子生徒が居た。

しかし彼の机には、マジックで書かれたであろう落書きやら

花瓶が添えられたりしていた。

はぁ・・・とため息が漏れる

俺はその日の放課後に武藤君を尾行した。

しかし、なぜか

「おかしい、視線を感じる。」

俺が尾行している武藤君はこちらに気づいている様子がない。

だとしたらだれが俺を見ているんだ？

ま、俺は二次元野郎だからそう言う妄想するときがあるから気のせいだろ

と思い俺は彼の尾行を続ける

彼の家は借家で同じ形の家が数件並んでいた。

家の中に入るのを確認した後、俺はインターフォンを鳴らそうとする、がやめる

なんで毎回ここでやめるのか。今回は前回とは違う視線を感じるんだ、さっきの

ふと後ろを振り返ると、電柱のかげと言うベタなところに人影があった

と言っても俺も電柱のかげに隠れてたんだけど・・・

「だれだ？」

上から読んでも下から読んでもだれだ。

俺は電柱の方へむかった。

そしてそこに居た人物は――――

「何だ、宮木か」

そう先週俺が学校に引きずり出した宮木だった

服装が制服のところ、帰宅せずに俺を付けていたとみた

「なにしてんだ？」

「追尾、尾行、ストーカー」

俺はケータイを取り出した

「もしもし、警察ですか？……ストーカーです」

思わず、学年主席の女性に不法侵入された最下位クラスの代表のような行動を取ってしまった。

「貴方もストーカーでしょ？」

「失礼な！俺は……そうでした。」

宮木にわけを話して、もう一度インターフォンを鳴らそうと手を伸ばす

ピンッ ま、よくあるチャイムで押す時にピーン、離すとポーンとなるやつがあるが

今回は押しても離しても『ピンッ』と一回鳴っただけ

「しょぼいインターフォンね」

「そう言うな。」

そして少し待ってから扉が開かれたが、完全に開かずチェーンがかかっていた

「スイマセン、むと——」

武藤君いますか？そう言いかけた時

「あなた方は私の息子をいじめて楽しいのですか！？」

といきなり怒鳴られてしまった。

家までイジメられてるのか……？

「あ、いえそうじゃなくて、俺は……武藤君の友達で……」

「そんなはず有りません！息子には友達なんていませんから！」

おいおい、母親のくせにそんなこと言うか。

と扉の向こうを見ると、制服姿の武藤君がこちらを悲しい目で見て

いる

「あの取り合えず、むと————治弥君に合わせてください。」

「あの子は今誰とも会いたくないの！帰って頂戴。」

色々勝手に決めつけている母親にだんだん腹がたってきた

しかし、何を言ってもききそうにもないので今日は引き上げる事にした

「どう思うよ・・・？」

「どうって何が？」

俺が宮木に質問するとまあそう返されるであろう答えランキング（集計は俺）4位の答えを出してきた

「だから、あいつの母親。なんで勝手に決め付けるんだろう・・・って」

「ああソレは息子への愛だね」

得意げに言う宮木だが俺は意味がさっぱりだった

「つまり、母親は息子がこうであってほしいと思ってるってことだよ」

「ええ・・・と誰とも会いたくないと思ってるって事か？」

「ま、そんなところ」

いや、さっぱりわからん。ま、つまりは親に縛られてるって事か？

さあてどうしようか、今日が金曜じゃなきやなあ・・・

そして土日は彼の家に行く事は無く、宮木からのしつこいメールにうんざりしていた

月曜日。俺は鈴木先生のもとへむかった

「先生。彼は強敵。頑張りましたが無理でした。パソコン返してください。」

「嫌です。」

即答かよ。俺は本当に頑張ったけど。

「じゃあ先生。あの母親を何とかしてください。」

「あの人は、モンスターペアレントなの。」

「何それ・・・？」

ペアレントは両親、親って意味だよな。そのモンスター？

「わかった！彼がモンスターで、母親がその進化モンスターだ！」

「違います。モンスターペアレントは・・・」

と15分くらい猿（俺）にもわかるモンスターペアレント講座を聞かされたあげくその母親はどうにも出来ないときた。ホントに頼む時は土下座するのに、それ以外は役に立たない野郎だ。まず教師は生徒の見本になる存在。簡単に土下座何かするもんじゃない。

「仕方ないわ。家にあるガン〇ムのプラモあげるか頼むわ」

「今度はモノで釣るのかよ。しかもたいがいプラモはコンプしてる。」

俺をなめるな。一人暮らしなのをいいことに部屋中プラモやフィギュア、ポスターに原作本に同人誌、DVD & blue iやら色々ある。

「ソレじゃあ一ついいこと教えてあげるわ。彼は——」

無理だ。絶対無理だ。AKD49ってアイドルじゃん！

俺はアイドルとかはボカロだけなんだ。

第一に三次元じゃん！無理だよ——そんなの無理だよ！

仕方ない、またパソコン買うか・・・チッ

全財産足してもパソコン一台も買えない。

「仕方ない。まず母親から説得するしかないか。」

こうして俺の母親口説き作戦は始まった・・・が

「俺は人妻好きじゃない。」

勘違いされるとアレだがら作戦名変えよう。

「うーん。母親おとし作戦・・・？コレも変わらん。」

ぶつぶつ念仏を唱えながら歩いていると校門で宮木が待っていた
「遅かったわね。」

「・・・母親尾行作戦・・・？」

「おい。」

「母親暗殺・・・ダメだ。よさそうだけどダメだ」

「おい！佐藤！」

耳元で叫ばれては無視できない。

「何だ、うるさいな。」

「今無視してたでしょ？また、不登校になっちゃうよ？」

「はいはい。勝手にどうぞ。」

本当にうるさい。俺は耳をふさぎながら武藤君の家に向かった

「また行くのか？」

「ああ行く。」

「アタシもイっていい？」

「お前は何処にいくんだ！？」

そんな漫才をしながら歩いて約10分。俺らは武藤宅に到着した
今回はとつとインターフォンを押す。

また昨日のようにチェーンが付いて母親が出てきた。

「スイマセン、治弥君います？」

「また来たの！？こりなわね。」

「別にイジメに来た訳ではないです。」

「なら、何しに来たの！？」

母親が怒りながら俺らにそう言う。しかし俺はなんて答えていいかわからない

「ええ・・・とはいっ」

と宮木の後ろに回り、ポンと宮木を付きだす。
ギッと宮木に睨まれる。

「あ、あの・・・あ、遊びに来ました。」

おどおどと言う宮木にギッと睨みを入れる母親
そして大きな声でこう言った

「ウチの息子は一人がいいの！ほっというて頂戴！」

そう言って扉を閉めようとする母親。俺は慌てて扉の隙間に足を入れ閉じさせないようにする

「孤独を好む人間もいるが孤独に耐えられる人間は居ない」

俺はそこでアニメの台詞を口にした。

そして母親はふんつと鼻で笑い、俺の足を蹴って隙間から外し、扉を閉める

今日も無理だったか・・・と諦めかけた時

ガチャンツと言う音がして扉が開いた

「汚いところだけど、座ってね」

そう言ってリビングに入る。とても綺麗に片付いていた。

「それで、君たちは本当に治弥の友達なの？」

「ハイ。そうです。」

俺は質問にはっきりと答える

すると母親がため息をつきこう言った

「有る時からあの子にそうで有ってほしいと思い始めたの——」

彼はAKD49が大好きで、部屋もCDやポスターが貼られているらしい。

しかし母親はそれを認めることが出来なかった
もともと成績がよく真面目だった息子。それが急にそんな方へ走って行ってしまったのだからそう思う気持ちはわからないでもない。

そしていつしか、自分の想い、理想を彼にぶつけていたらしい。

自分がうまくいかなかった分彼に期待し、父親の会社が倒産した時も彼を期待した。

そんな感じで期待し続け、重いものを持たせ過ぎた。

彼は2年になって生活態度が悪くなり、周りから友達が離れて行き、ソレが許せなかった母親はすべてをAKD49のせいにして部屋のポスターをはがしたりグッズもすべて捨てた。

ソレが悔しかった彼はもう一度すべてのグッズを買い、さらに深く引きずり込まれてしまったらしい。

「ソレは全部貴方がわるね」

宮木も同感だったらしく母親にそう言う。

「そうだな、取り合えず、治弥君に合わせてください。」

そう言っ僕は彼の部屋に向かった。

彼は引きこもってるわけではないが、部屋からは俺や宮木と同じ感じが漂ってくる

「入るよ、はるちゃん」

そう言いながら引き戸を引く母親。そして部屋の中を見た瞬間に顔をそむけリビングに帰った。

「武藤君。」

「キミたちは金曜にB組に来た・・・」

PSPを持っている彼がこっちに近づいてくる。

「出てけ。僕はキミたちと話す事は無い」

はあま、俺らと話が合うかわからんが・・・

「ま、待てせっかく来たんだから、」

「そうですね。パーっと明るくやりましょう。」

そう言う宮木が無理やり部屋に上がり、ソファにドサッと腰をおろした

「お前、母親に期待されてよかったな。」

俺もソファに座りながらそう言う武藤が顔をしかめた

「いいわけ無いだろ！！僕だって、出来る事と出来ない事があるんだ！」

PSPをたたきつけるように置いて俺に向かって大声で叫ぶ。

「そりゃそうだろうな。人間だから。」

「でも、親の期待にはこたえないと・・・」

さっきまでの勢いがなくなり、表情が曇る

「期待にこたえて何になる？」

「そ、ソレは・・・」

「母親がうまくいかなかったら問題点を改善すればいい。父親の会社が倒産したら新しく仕事を探せばいい。全部お前がやる事じゃない。」

今の俺カッコよくね？と自分でもい顔がどや顔になるのがわかる

「でも、お母さんは何でも僕に期待してくれるから。」

「だったら、母親に言ってやればいいだろ！？少しの期待があればそれいいと思う。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「だから俺はお前に期待する。小さな期待だ。」

—————全部一人で背負わない、普通のオタクになってくれると期待してる。

バンと引き戸をたたくように開き、走って行く武藤君。

俺はそのあとを追った。

「お母さん。僕はお母さんの期待してるような人間じゃない！」

「はるちゃん・・・」

武藤君が真剣な顔をして母親と向き合っている。

「でも、期待される人間になる。大きな期待にはこたえられないかもしれない。沢山の期待にはこたえられないかもしれない。でも、

それでも僕は期待には精一杯答えて行きたい。」

答えられないのか、答えられるのかわからない、その答えは正真正銘、武藤治弥の答えだった

「はるちゃんゴメンね、コレからプレッシャーになるような事は言わないから。」

「ううん。良いんだ。こっちも期待にこたえられなくてゴメン。」

もう俺らは必要なさそうだと思い俺と宮木は黙って家を出た

「なんだかんだ言って、今回は家庭事情だったからよかってケド。」

「ケド・・・？」

「俺はAKD49苦手なんだよ。ホントにその話題が出なくてよかった。」

俺と宮木の影が前に長くのびて、周りの道は赤く染まっている
すると後ろからもう一人分の影が伸びる。

振り返るとそこには、夕陽で赤くなった武藤の姿。

そしてその表情は影になっていたがはっきり見えた。

さっきとは違った笑顔だった。

「先生。解決しました。パソコンを返してください。」

「そうですね。彼はあの後積極的に他生徒に話しかけるようになった元気にしているところを見ると、解決したんでしょね・・・。
いいでしょう。返します」

そう言って返してくれたのは1台。

「後9台は？」

「え？誰も10台全部返すとは言ってませんよ？」

くそお騙された。今回の仕事はたった1台分か！？

「はあ仕方ない。いつか返してもらおうかな？」

そう言い残し生徒指導室を後にすると、目のまえに二人のオタクが立っていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364z/>

二次元野郎と・・・

2011年12月2日16時51分発行